

動き出すと、もはや観測者がすることは何もありません。得られたデータはORAC-DRによりその場で解析が行なわれます。極端なガイドエラーなどが起こらない限り、ほぼ完全な解析結果を得ることができます。あまりにも自動化の行き届いたこのORACシステムは、かえって教育的ではないとさえ思えたほどです。シーイング0.4～0.5秒角という好条件に恵まれた私たちは、観測中とくに大きなトラブルに見舞われることもなくすばらしいデータを手にすることができました。質の高いデータを得られたことに感謝すると同時に、再び観測のために

この地を訪れることを夢見ながら、山頂の望遠鏡群を後にしました。

今回の渡航では多くの方々にお世話になりました。観測に同行してくださった柏川さん、大山さん、急用のため観測には参加できませんでしたが本研究で多くのアドバイスを下さった家正先生、そして渡航費の援助をしてくださった日本天文学会早川幸男基金の関係者のみなさまに深く感謝いたします。貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

三澤 透 (東京大学)

Observational Evidence for a Slim Disk in the Galactic Microquasar GRS1915+105

渡航先—フランス・コルシカ島

期 間—2002年5月24日～6月2日

今回、私は5/27～5/31までフランスのコルシカ島で行われた第4回マイクロクエーサー・ワークショップに参加してきました。その理由は、前回スペイン・グラナダでの第3回ワークショップに参加し、この会議が世界一流の研究者に出会える非常に稀な機会だと感じていたことと、博士論文の内容を発表したいと思ったからでした。前回口頭だったため、今回も口頭発表を狙っていたのですが、残念ながらポスター発表になってしまいました。マイクロクエーサーとは、相対論的ジェットを噴射する太陽質量の数倍程度のコンパクト星（ブラックホールや中性子星）連星ですが、話題は非常に多岐に渡り、AGNやガンマ線バーストなどジェットに関連するもの全てを網羅していました。また、理論から観測まで中身の濃い内容でした。現在の降着円盤の基礎となる標準円盤を唱えたSunyaev氏や、光学的に厚い移流優勢円盤（スリム円盤）のAbramowicz氏などの錚々たるメンバーが参加していました。参加者は全員で80人程度

だったと思います。口頭発表で特に私が面白いと思ったのは、チャンドラ衛星によるブラックホール候補天体から初めてX線でジェット成分を検出したという話、電波や光で連星の固有運動を求めてその軌道計算から過去に遡ることでBHの形成を探るという話、中性子星でも光速に近いジェットを出しているという話などです。一方でポスター発表は、やや狭い場所でパネルの表・裏を使うという形で昼食などの合間を縫って行われました。全部で約20程度あり、興味深い内容がたくさんありました。私の発表を注目してくれた人も何人かおり、有意義な議論ができました。

ただし、痛切に思ったのは博士論文の内容を早く投稿論文にせねばということでした。投稿論文にしないと名前を売ることは出来ないし、世界中の研究者が同じ天体を研究しているため、相手に先を越されてしまう可能性もあります。また、今回の研究会では一部の人としか話は出来ませんでした。論文で名前をよく見ている人を間近で見て、この人が～の論文を書いている人かと思って、今後自分ががんばってゆききっかけにすることができます。

最後になりましたが、研究会出席に際し、渡航旅費を援助いただいた早川基金に感謝致します。海外の知合いもでき、大変貴重な経験ができました。また、今後もこの会議に参加してゆきたいと思っています。

山岡和貴 (理化学研究所協力研究員)